

旧約聖書を読んでいきますと、最期に短い預言集がまとめられております。これを十二小預言書と呼んでおります。イザヤ書、エレミヤ書等のように文章も長く、時代的にも活躍が長期に及んだものと違い、大変短いものでありますが、そのかわり読みやすく、私に達の心に語りかけてくるもの大であると思います。さきほど読んでいただきましたヨナ書もそのひとつで、これは物語的で読みやすく、親しみのある預言書であります。三日間魚の腹の中にいた物語と言えば、思いだされる方もおられるのではと思います。

ヨナ書の内容を簡単に振り返ってみますと、ヨナは主なる神からニネベという町へ悔い改めを伝えるために遣わされることになったのですが、逃げてしまいました。そして船に乗り遙か遠くへ行こうとしたのですが、主なる神が嵐を起こされ、船は沈没寸前になってしまいました。この災いは自分が主なる神の命令に従わなかったためだとわかったヨナは、乗組員達によって手足を捕えて海に投げだされてしまいます。その結果嵐が止み、人々は救われました。ヨナもまた魚に飲み込まれて難を逃れ、三日間腹の中にいることになったのです。

ヨナは魚の腹の中で反省し、主なる神の使命を忠実に果たす決心をしたのでした。主なる神の命令により魚はヨナを陸地へはきだし、ヨナはニネベの町に悪の故の滅びを伝えに行きました。ヨナの言葉を聞いた王様をはじめとするニネベの人々は、一様に悔い改め、悪の道を離れました。主なる神はそのような人々を見て、宣告した災いをくらすのをやめられたのでした。

ところがヨナは面白くありませんでした。自分は災いにあって主なる神の使命を果たす決心をさせられたのに、ニネベの人々は悔い改めることによって救われてしまいました。自分だけが悲劇の主人公のように思えたのでしょうか。ヨナは怒りを発し、主なる神にいやみを言います。そしてヨナは都を出て東の方に座り込み、そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとしめます。主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられました。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜びましたが、翌日の明け方、主なる神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまいました。日が昇ると、主なる神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられ、太陽もヨナ

の頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。

「生きているよりも、死ぬ方がましです。」

こうしてヨナは主なる神がニネベを愛しておられたこと、そして主なる神の本当の目的は人々を滅ぼすことではなく、悔い改めて正しい道に立ち返らせることであったのを学んだのでした。

この物語は多くのことを私達に教えております。主なる神は私達にそれぞれ使命を与えておられますが、それを果たすかどうか、引き受けるかどうかは私達個人の決断にかかっております。主なる神は決してむりやりにさせようとはなさいません。しかし主なる神は使命を果たしても果たさなくてもいいと言っておられるのではありません。主なる神はその人の決断によって審きを行われるのです。御心にかなっていれば祝福され、かなっていなければ悔い改めを促されるのです。ヨナもまた、主なる神によって実は悔い改めを促されたのでした。

次に大切なことは、主なる神が全ての人を分け隔てなく愛される、その人その人にふさわしい方法で働きかけているのを、自分の判断で押し量ってはならないということです。主なる神が祝福されるのはその人のためであり、そしてすべての人のためであり、ひいては主なる神の御栄えを現されるためなのです。

最後に考えたいのは、自分が主なる神の祝福や恵みを受けているときには、主なる神を賛美し使命を果たそうとするが、逆境にあるときは主なる神に不平をもらしたり、怒りを発したりすることはないかということです。主なる神はヨナに言われた間を私達にも投げかけておられるのです。「お前は怒るが、それは正しいことか」。主なる神の使命に喜びをもって臨んでいくことこそ、主なる神が喜ばれる信仰生活であることを教えております。私達自身もまた、信仰生活において腹を立てることはないでしょうか。逆境にあるとき不平をもらすことはないでしょうか。私たち全ての信仰生活において、主なる神が発せられた「お前は怒るが、それは正しいことか」との間を思い起こしたいものであります。